

【岐阜女子大学】メタデータ項目と記述内容

	メタデータ項目	メタデータ記述欄
1	ID	
2	表題名	沖縄のサトウキビ
3	資料名	有用植物としてのサトウキビ
4	内容分類	郷土・歴史
5	索引語	沖縄、生活文化、サトウキビ、SDGs、有用植物
6	説明	<p>有用植物とは、私たち人間の生活とさまざまな面で深く関わっている植物のことである。サトウキビもその一つで、琉球王朝時代から現在に至るまで、沖縄の人々の生活と密接な関係をもってきた農作物である。</p> <p>サトウキビは、琉球王朝時代に儀間真常（1557～1644）によって中国・福建省から栽培方法と製糖技術が伝えられた。これにより沖縄では砂糖生産が広まり、サトウキビは重要な作物として定着していった。</p> <p>現在では、沖縄県の全耕地面積の約5割がサトウキビの栽培に使われており、県内農家の約7割がその栽培に従事している（令和4年度 沖縄県農林水産部調査）。サトウキビは強風や日照りに強く、高温多湿を好むため、台風の多い沖縄の気候にも適している。栽培から製糖、加工、販売に至るまで多くの雇用を生み出し、地域経済を支える主要な農産物となっている。</p> <p>サトウキビは沖縄方言で「ウージ」と呼ばれ、沖縄の特産品である黒糖の原料としても知られている。黒糖は郷土料理や菓子、土産品など幅広く利用され、古くから沖縄の慣習や生活文化に深く根付いている。</p> <p>沖縄県恩納村にある野外博物館・琉球村では、伝統的な製糖方法である砂糖車（サーテー車）を見ることができる。これは牛や馬、水牛などに砂糖車を引かせてサトウキビを搾る方法で、儀間真常によって中国から伝えられた技術の一つである。動物が軸木を引いて歩くと歯車が回転し、そこにサトウキビを入れて汁を絞る。絞られた汁は地下のパイプを通してタンクに集められ、大きな窯で約5時間、120度であくを取り除きながら煮詰める。その後、鍋に移して空気を含ませながら攪拌し、固めることで黒糖が完成する。</p> <p>また、近年では、サトウキビの搾り汁から取り除かれた糖蜜はバイオエタノールの原料や家畜の飼料として利用され、搾りかすであるバガスは製糖工場の燃料や次のサトウキビ栽培の肥料として活用されている。このようにサトウキビは、持続可能なエネルギー資源としても注目されている。</p>
7	形式	静止画(jpg)
8	氏名	撮影者：＊＊＊＊＊＊
9	時代・年	撮影日：2025/02/09
10	地域・場所	沖縄県島尻郡西原町
11	利用条件	表示 4.0 国際(CC BY 4.0)

12	関連資料	なし
13	権利者	岐阜女子大学
14	協力者	
15	登録日	2025/02/15
16	登録者	宮田璃音
17	ファクトデータ	circd0862-0005.jpg
18	サムネイル	
19	公開の可否	
20	*特色	<p>①与那原・西原地区とサトウキビ</p> <p>岐阜女子大学沖縄サテライト校が位置する与那原・西原地区は、戦後からサトウキビ産業が盛んな地域であり、サトウキビの名産地として知られてきた。かつては県中南部で最大規模の製糖工場が存在するなど、地域はサトウキビ産業と非常に深い関係を持っていた。</p> <p>しかし近年では、食生活の変化や後継者不足に加え、地域の観光化が進んだことにより、産業構造が変化している。これまで地域を支えてきた窯業やひじき漁、サトウキビ産業といった一次産業は縮小しつつあり、現在では飲食業をはじめとする住民や観光客向けのサービス産業へと移行しつつある。</p> <p>このように、与那原・西原地区では、かつての基幹産業であったサトウキビ産業の歴史を背景にしながらも、時代の変化に応じた新たな地域の在り方が模索されている。</p> <p>②SDGsとサトウキビの関わり</p> <p>サトウキビはSDGsとも深い関わりがあり、とくに「目標15 陸の豊かさも守ろう」と結びつけて考えることができる。沖縄の自然を守るうえで、サトウキビは重要な役割を果たしている作物である。</p> <p>沖縄では、米軍基地による環境汚染や開発の進行、赤土の流出など、土地や生物の環境に関わる問題が年々深刻化している。森林が減少し、土壌が流出</p>

すると、生物が暮らしにくくなるだけでなく、川や海の水質も悪化し、地域全体の自然環境に大きな影響を及ぼしてしまう。

このような状況の中で、自然への負担をできるだけ抑えた農業や、地域の資源を生かした環境にやさしい取り組みが、これまで以上に重要になっていく。その代表的な例が、沖縄の主要作物であるサトウキビである。

サトウキビは光合成能力が高く、太陽の光を受けながら効率よく二酸化炭素を吸収する植物である。そのため、栽培すること自体が CO₂削減につながる、環境にやさしい作物といえる。沖縄の土地に広がるサトウキビ畑は、農業としての役割だけでなく、「陸の豊かさ」を守り、自然環境を支える存在としても大きな意味を持っている。

③ウージ染め

ウージ染めとは、サトウキビを利用した染め物や織物のことで、「ウージ(うーじ)」とは沖縄の方言でサトウキビを指す言葉である。

染色には、サトウキビの葉や穂の部分が用いられる。刈り取った葉を細かく切り、2~3時間かけて煮出した後、こす作業を2回繰り返して染液を取り出す。その染液を使い、糸や布を染めていく。

染めの方法には大きく分けて二通りある。あらかじめ糸を染めてから織り上げる「先染め」と、織り上げた布を絞りなどの技法を用いて後から染める「後染め」である。用途や表現したい模様によって、これらの方法が使い分けられている。

ウージ染めの大きな特徴は、染液につける時間やサトウキビの葉を刈り取る季節によって、色合いが微妙に変化する点である。若草色や萌葱色といったグリーン系の色合いから、黄金色のような落ち着いたイエロー系まで、さまざまな自然な色を楽しむことができる。

また、葉が青々と育つ夏の時期には黄色味の強い色に染まり、冬には渋みのある落ち着いた色合いになる。このような季節による色の変化も、自然の恵みを生かしたウージ染めならではの魅力といえる。

④黒糖ウェーキ（黒糖大尽）

1623年頃、琉球国で生産・輸出されていた黒糖は、鎖国体制下にあった日本にとって非常に貴重な品として珍重されていた。この状況に注目した、当時琉球国を支配していた薩摩藩は、儀間真常を通じて黒糖産業を奨励し、その発展に力を注いだ。薩摩藩は黒糖を専売制とし、生産の拡大を進めることで安定した利益を確保しようとした。

時代が進み、明治以降も黒糖は沖縄を代表する重要な産業として位置づけられた。とくに中部・北部地域では、黒糖生産を基盤として財を成す人々が現れ、その成功者を指す言葉として「黒糖ウェーキ（黒糖大尽）」が生まれた。「ウェーキ」は「大宅（ウエケ）」が変化した言葉であると考えられている。

黒糖は薩摩藩の流通ルートによって関西方面で販売され、その価格は独占体制のもと、薩摩藩によって管理されていた。また、公家や貴族の間では黒糖は「貴重薬」として扱われており、同じく琉球から輸出されていた「ウコ

		<p>ン」も、薩摩藩の取り扱い品目の一つとなっていた。</p> <p>こうした黒糖取引による莫大な利益によって、薩摩藩は三百万両といわれる赤字財政を解消しただけでなく、二百万両の黒字を生み出したとされている。その資金をもとに、薩摩藩はフランスから軍艦や鉄砲を購入し、長州藩と「薩長同盟」を結成した。そして、明治維新における中心的な勢力としての地位を確立していった。</p> <p>(参考：亀島靖・沖觀協,『琉球むらものがたり 琉球王朝を支えた村里』, 琉球村.)</p>
2 1	*活用支援	
2 2	*利用分野	教育、生涯学習、地域学習、観光
2 3	*改善結果	
2 4	*処理プロセス	
2 5	機関外リンク情報	
2 6	目標	
2 7	紹介	